

岩角山会報

第15号

令和7年6月発行
発行責任者
岩角山観光協会
(岩角寺内)
住 所
〒969-1205
本宮市和田字東屋口84
TEL.0243-44-3354

会長あいさつ

岩角山観光協会会長
平 晴夫

岩角寺檀信徒の皆様には、日頃より岩角寺催事並びに岩角山観光事業活動に対しご理解とご協力を賜り深く感謝申し上げます。

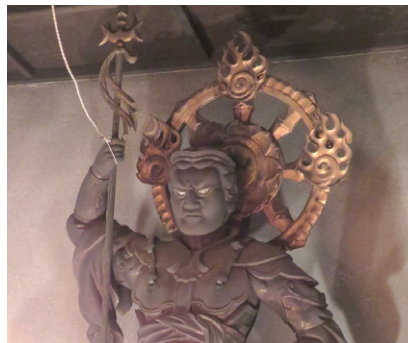
この度、石橋實前会長の後任として会長に就任しました平晴夫でございます。何卒よろしくお願い申し上げます。

千百七十四年の歴史ある霊場であり、全山が県指定の天然記念物である岩角山、発信力を高め県内外の皆様には足を運んでいただけ



雪化粧の岩角寺本堂

るよう、観光協会の目的であります観光事業活動の推進と観光客の誘致を図り、合わせて地域の発展と活性化に寄与するよう、新役員一同住職と責任役員の助言を得て、和をもって取り組んでまいりますので何卒よろしくお願いいたします。



毘沙門天王

磐梯山、信夫三山も見えるよ

岩角寺責任役員

影山 公平

岩角山頂西側、重なり合った岩の上が自然のままの展望台です。この遥拝石からは、昔と今の景色が一望できます。

北の正面には、二本松霞ヶ城天守の石垣が望まれ、展望の良い岩角山が二本松藩の山城であったこと、戦



展望台からのパノラマ

火で焦土と化したことが領けます。

南から西、そして北の稜線を見渡すと、左から右に那須連山、安達太良、吾妻、蔵王連峰、手前には霊山の山並み、その中に和尚山の南側稜線の中腹奥に磐梯山が見え隠れし、眼下にはその昔芭蕉も歩いたという奥州街道が確認できます。

また、現代の高速交通網の要であります東北新幹線と東北自動車道。昔から現代に通じる歴史が一望できる仙境の地です。

ゆっくり歴史を感じながら過ごしてみてはいかがでしょうか。

石の角が出た

岩角寺住職

佐藤 教順

当山には、岩角寺の名の由来となった寺宝「岩角」があります。



岩 角

長さ七十五センチ、太さ十五センチの大ききで、岩窟の中に、一本の石の角が突き出ており、その石によつて岩角寺と名付けられたと伝えられております。お檀家の方から「一度も岩角を見たことない。どこに保管してあるの」と尋ねられたことがあります。大事に保管することも必要ではありますが、多くの方に見ていただき、千百年以上の歴史を感じていただくことも大切ではと考え始めております。

大梵天祭

令和七年一月三日 今年も真冬とは思えぬ温かさ、好天に恵まれ、大梵天祭が開催されました。
午前十時十分から本館二階において、梵天清め式、続いて十一時から梵天奉納行列、大般若転読大護摩供祈禱が行われました。

境内では、三回に分け合計十二本の大梵天が奉納され、梵天争奪戦が行われました。
今年は、カンボジアから本宮市に働きに来ている方々も梵天争奪戦に加わり、元氣いっぱい奪い合っていました。



梵天争奪戦



梵天奉納行列



梵天清め式

ステージイベント

境内に設けた特設ステージでは和田小学校和太鼓クラブや安達太良太鼓保存会



和田小和太鼓クラブによる演奏

カンボジアは仏教の盛んな国で、野菜の南瓜はカンボジアから伝わったと言われています。



カンボジアの方々



文化団体の舞踊



安達太良太鼓の演奏

の演奏、地元文化団体による舞踊、そして恒例となっております歌手原田雪見さんのステージで盛り上がりつつありました。
原田雪見歌謡ショーは三部構成で行われ、観客席の中まで分け入り、お客様と



原田雪見さん

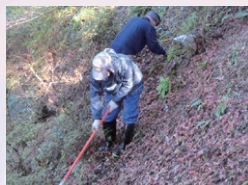


福銭まき



餅つき

のふれあいを大切にした歌謡ショーでした。
最後に餅つき、福銭まきそして豪華景品入り抽選会で締めくくりました。



金梵天の作成



お山の清掃

竹割作業

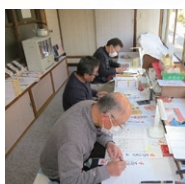


梵天祭は、檀家の皆様のご奉仕により成り立っているイベントです。祭典当日はもちろん事前準備から後片付けまで約二か月にわたって奉仕いただき、盛大なお祭りが開催できました。ご協力いただいた皆様ありがとうございます。

梵天祭を陰で支える檀家の皆様



まかないの協力



筆耕作業



奉賛会のみなさん



消防団員による警備

元朝祭と初詣

令和七年一月一日午前一時から毘沙門堂で元朝祭が行われました。令和六年は、能登半島地震から始まり、波乱にとんだ一年でした。令和七年こそは平穏な年になってもらいたいものです。



幻想的な雰囲気で行われた元朝祭



初詣での家族づれ何をお祈りしているのかな

金花水不動尊採燈護摩供大祭

岩角寺境内には金の花が咲く清水、金花水が祀られています。この清水は、金運の清水としても有名ですが、七月十五日境内において金花水不動尊採燈護摩供大祭が行われました。前日の夜から降り出した雨が、当日の午前中も降り続き雨の中の開催かと思われましたが、祭典開始の数分前にやみ、曇り空の蒸し暑い中で予定通り開催することができました。境内中央に檜の丸太でくみ上げた高さ約一・五メー



採燈護摩祈祷の様子

トルの護摩壇が作られ、午後二時この護摩壇に火が放されました。燃え盛る護摩壇に願い事を書いた木片を僧侶が読み上げ奉納しました。護摩壇は、岩角寺役員が山から切り出し、乾燥させたものを使用します。護摩壇の炎は最盛期には高さ六・七メートルにも達し、天まで上る勢いです。またお焚き上げの煙はお寺を包み込むように境内いっぱいに充滿し、この世の厄を包み葬ってくれそうな気がします。



涅槃図の前で法要

涅槃会とは、お釈迦様の亡くなられた日に行われる法要のことで、仏教の三大年中行事のひとつとされています。二月十五日午前十時から、総代、観光協会役員、伝道師会員約二十名が参加し、本堂にお釈迦様がなくなった時の様子を描いた図(涅槃図)を掲げながら法要を行いました。

お涅槃会



丸太の切り出し作業

西明内墓地棺台 小屋解体撤去

西明内墓地には以前棺台を収納していた小屋が建ててありましたが、近年は使用されず、建物だけ残っておりしました。

風化が進み危険となったことから棺台小屋の解体が行われました

三月一日早朝より総代の皆さん十五名がハンマーやチェーンソーを用いて手慣れた手つきで作業を行っていました。昼前にはすべての作業が完了し更地化されました。



解体の様子



撤去後

岩角山の紹介

岩角山は天台宗総本山比叡山延暦寺の直末寺で正式には和田山常光院岩角寺(わでんさんじょうこういん)がくじ)と言います。

開山は、西暦八五一年で慈覚大師(円仁)が開基されました。

山中に点在する岩石(花崗岩)には佛像など八百八軀が刻まれています。

昭和四十七年には、延暦寺より「一隅を照らす運動」の修練道場として指定を受け、会社員や学生など一般の方が精神修行のため座禅を組んだり、写経を行い自己を磨いております。

本号では、岩角山の何気なく見過ごしている文化財等の一部を紹介していきます。



奥の院



山頂に阿弥陀如来を安置してある堂宇で、古代建築方法で建てられた珍しい建物です。

いつ建造したか定かではありませんが、岩角山最古のものと考えられています。

この阿弥陀如来堂裏の岩石に、キリクという梵字が刻まれており慈覚大使が当山を開山した印とも言われています。

大黒天

岩角寺境内奥、毘沙門堂に上がる階段踊り場の



大黒天堂に安置されているのが、七福神の尊天の一つである大黒天です。信仰すれば家運繁盛、幸福が来福すると言われています。

この石像は、江戸時代寛永元年(西暦一六二四年)に甲州の石工により彫刻されたと伝えられています。

現在目視できるのは木造の像で、その裏側に石像が安置されています。

照願脚下



岩角寺玄関の引き戸上部に、樗の板に筆跡された四字熟語です。

これは、仏教用語で、自分の足元をよく

見よという意味、他に向かって悟りを追求せず、まず自分の本性をよく見つめよという戒めの語です。

この文字は、今は亡き佐藤俊董元住職が筆耕されたものを板に彫り込んだものです。

懸魚(げぎょ)



本堂や庫裡の屋根の破風板部分に取り付けられた妻飾り。

この「懸魚」の語源は、文字通り「魚を懸ける」こととであり、水と関わりの深い魚を屋根に懸けることによって、火に弱い木造建物を火災から守るため、火伏せのまじないとして取り付けられたものです。

編集後記

今年は昭和百年の節目の年に当たりますが、近年は、世の中がせわしく時代の流れに、着いて行くのが大変です。

そんな中、岩角山の自然や仏教遺産に触れると、なんとなく癒され、一時心が落ち着く感じがします。

そんな岩角山の環境をこれからも守っていきたいと思います。

(編集委員一同)